

「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第1回：第1章-その1-

かくも、対人援助の理想と理念は現実につぶされる

渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

あの日を告白する

恥を忍んで、告白する。もう四半世紀前となる、あの日のことを。

私、渡辺修宏はその時、工作中にもかかわらず、思わず涙がこぼれてきてしまったので、右手にもっていたシャワーノズルを自分の顔にむけた。ちょうどよい温度のお湯が、私の顔にかかり、そのまま全身を濡らした。

「ああ、手元がずれちゃって…。あははは…」

私はそうつぶやき、わざとらしさを隠しきれないまま、濡れた全身をなんとかするために入浴介護の続きを同僚に任せて、逃げるように別室に移動した。不自然な笑い方を整える余裕はなかった。とにかく1秒でも早く、その場から離れたかったのだ。なぜならば、私の泣き顔を、震えるほどみじめ弱い自分を、誰にも見せたくなかったからだ。

当時、私は、今でいう「障害者支援施設」のソーシャルワーカー（以下、援助者）であり、主に重度の重複障害者（知的障害、身体障害、精神障害者等）の生活援助全般を業務としていた。そして、この頃の私は、職場の同僚とまったく理解しあえていなかった。なによりも、まず私自身が、同僚を理解できない/理解したくないと、頑なに成っていたのであった。

当時、私の職場では、利用者の「背中や腕をはたく」、「頬をビンタする」という援助者の行為が、日常茶飯事のように起きていた。時には、プロレス技である「ローリングソバット（いわゆる後ろ回し蹴り）」や「ジャイアントスイング」が、まさに私の目の前で繰り広げられていた。

「やめてー！！」

「いやいやー！！」

「死んじゃうー！！」



プロレス技：ジャイアントスイング

普段の日常において、プロレス技をかけられた利用者たちの悲鳴が、頻繁に、あたり一面に響いていた。

同僚X（6つ年上の先輩）は、そんな利用者の声に心を動かされることなく、「てめー、こんな時ばかり、素直になるな！」とか、「なんで言うこと、わかんねえんだよ？」とか、「何度言えばわかるんだよ！」と声を荒げて、技をかけ続けていた。そんなXと利用者のやりとりを目の当たりにして、私は、黙ったまま、胸の内で突っ込んだ。

「(言ってわかるくらいだったら、利用者たちは施設に入所してくるわけないじゃん…。)」

私が、なぜ、Xにそんな突っ込みを明言しなかったのか？

それはすでに、その行為が逆効果であることを体験していたからであった。

というのも、私が初めて、Xによる「殴る」「蹴る」を目の当たりにした時、私は咄嗟に、そのXの振りかぶった右のこぶしが再び利用者の肩に落ちる前に、私の両手でそれを止めてしまったのだ。つまり、私の両手が、Xの右腕をつかんだのである。

Xは、そしてXの目の前で腰を抜かして座り込んでいる利用者ももちろん、さらに、少し遠くにいた他の職員もまた、突然の私の行為にびっくりして固まってしまった。一瞬にして皆が私に注目した。そんな彼らの挙動に気づいた私は、何をどう言えばこの事態が丸く収まるのかを必死に考えて、できるだけ冷静な表情をつくり、Xに次のように発した。

「殴らなくても…、なんか、他の方法で指導すれば、いいんじゃないっすかね…？」

私としては、「Xの立場ややり方を尊重した上での発言」という体裁を、それこそ全力で作ったつもりであった。しかしXは、一瞬、ぼかんと口を開けて間を作った後、急に強面な厳しい表情を見せ、私を怒号した。

「なんだ！ナベ（「渡辺」の略、つまり私のこと）！なんで仕事の邪魔をするんだ！俺が必

死になってこいつを指導しているのがわからないのか！」

それからXは、端を切ったように、私の態度があまりにも無礼で、生意気で、失礼で、お門違いで、常識はずれであるかと指摘してきた。私は、その迫力に圧倒され、両足をすくませつつも、「(…ここで怖気ついてしまつては、伝わるものも伝わらない)」と、石にかじりつくような思いで相手の目を見て、同時に、それがにらみになってないように気を付けつつ、言葉を選んだ。

「…ええと、暴力ではないカタチで、生活指導を行うのがベストだと思って…」

かすかな声で、必死に絞り出して、なんとか冷静さを保ちつつ、Xに投げかけた。

しかし、結果的にそれは大失敗となった。すぐさまXは、他の職員を集めつつ、大きな声で反論した。

「暴力じゃねえよ！『愛の鞭』だろうが。こいつら（利用者）が可愛いから、愛情をもって接しているだろうが！ナベにはそれがわかんねーのかよ！お前には愛情がねえのかよ！」

私は絶句した。想定しなかった言葉が怒涛のように押し寄せてきて、自分の脳が空回りする音を聞いた。

「(「愛の鞭」。「愛の鞭」だと？これが「愛の鞭」と言えるのか…?)」

へらへら笑いながら、時におびえる利用者の姿や悲鳴を喜んでいるようにもみえたXが放った言葉は、少なくとも私が20年強、生きてきて、学んできた「愛の鞭」が意味するところと、あまりにも大きく異なっていたからだ。

愛の鞭。

それは、相手への愛情と、期待と、願いが深いゆえに強いがゆえに、あえて心を殺して厳しいかわりをする。時にそれを行使する方も傷つき、その切なさに耐えながら、心の中で涙を流しながらも強い処遇を行うこと。愛の鞭とは、それを行う者も受ける者も、どちらも痛みを背負いながらも何か大切に尊い未来にむけて進もうとすることであると、私は子供の時に体験し、学んできた。親や、小中学校の先生たちの姿から、「愛の鞭」をみてきていた。

それが今、自分たちより幼く、知的障害や肢体不自由を有する若者を正座させ、およそ5キロもあるブロックをその両膝の上に置かせ、災害避難用のヘルメットをかぶらせて、そのヘルメットめがけて「後ろ回し蹴り」をする援助者が、「愛の鞭」を語ったのであった。

信じられなかった。

奇声、雄たけびをあげる利用者が必死になって逃げようとしつつも、その行為を威圧的な態度と言動で防ぎ、笑いながら「蹴り」を入れる「職業」援助者が、今、私の目の前にいることが。そんな援助者が「愛の鞭」を主張することが。

あまりのショックで、何をどう伝えるべきか、まったく言葉がでてこなかった。呆然としてしまった。

ただ、そのショックは、タイプは違えども、Xにおいても同じようであった。おそらく、Xは次のようにショックだったに違いない。

「(…面と向かって自分の仕事を邪魔された、文句を言われた、否定された)」

「(…しかもその相手は、つい先日、社会人になったばかりの新人)」

「(…しかもその相手は、自分の仕事に対して『暴力だ』といちゃもんをつけてきた)」

おそらくこのようなショックやひっかかりによって、Xはひどく不機嫌になったのだろう。Xは、他の職員に声をかけて、私を別室に呼び出した。

それから私は、いわゆる生活指導員室で、Xをはじめ同僚3人に囲まれた。部屋は一気に、非常に陰悪なムードを漂わせた。そして、そこで私が、その3人から注意された内容は、おむね次のような内容であった。

1) 知的障害があっても「だめなことはだめ」と、利用者に教えなければならない。それが保護であり、更生指導であり、援助である。

2) 知的障害者、特に重度知的障害者に対して、いくらきれいごと、やさしい言葉を並べても伝わらない(時が少なくない)。

3) 本当に大事なことを知的障害者に教えるためには、体で教えなければいけない。

以上が、つまるところ彼ら3人が私に伝えてきたことであった。

その3点に対して、私は、直ちにそれが誤っているとは思わなかった。つまり、ある意味で納得したのである。

「ダメなことはダメ」。例えば、刃物を持ち出して自他を傷つけるような行為とか、自分の汚物をあたり一面にまき散らすような行為に対しては、ただちに変容させる必要があると普段から考えていたからだ。そして、知的障害を有する一部の方々には、いくらやさしい言葉を並べて、ゆっくり話しても、耳元でささやいても、結局なにも言わんとすることが伝わらないことなぞ、毎日経験していた。そしてそんな時は、体を使って、身振り手振りを駆使したり、相手の手や足を持って、一緒になって行動したりして、その場面、文脈、状況でしてほしいこと/わかってほしいことを伝えていたからだ。つまり、彼らが言っていることは基本的に、私も常日頃考えていることとそう大差ないことであった。

だがしかし。

だからといって。

「殴る」、「蹴る」、「ビンタする」、「ローリングソバットする」、「ジャイアントスイングする」ということが、肯定されることにはならない。

その一点で。

その一点が、私と彼らの違いを明確にする、とてつもなく大きな違いであった。

しかし、私にとってはあまりにも大きな違いであっても、彼らからすると、「渡辺はまだ、世間をしらない『おぼっちゃん』だから」の一言で片付く問題だったらしい。

「ナベ…。おめーもよお…これから社会経験を積めば、そのうちわかるよ…」

私の主張は、私にとっての問題は、彼らに一蹴されてしまった。

そんな些末な違いより、彼らからすると、「(社会人経験が乏しい新人の渡辺が、なぜ、こ

うも先輩にかみつくのか、楯突くのか、ありえない…)」ということのほうが、大きな問題であったようだ。

「なんて生意気なんだ…」

「人のメンツをつぶしやがって…」

「世間知らずのぼんぼんが…」

「人の苦労も知らずに好き勝手言いやがって…」

「んじゃ、てめーは、あの利用者の問題行動をとめられんのかよ？」

思いもよらなかった言葉を三方から浴びせられて、私は本当に、呼吸もできなくなるくらい息苦しさを感じた。とにかく、全身でひしひし感じたことは、私が言わんとする「暴力で援助を展開してはいけない」という、私にとっての「当たり前」の発想が、彼らと私で全く共有化されていないということであった。

空気を吸うことも、吐くこともままならず、私は彼らから説教を受けた。

おそらくただが5-10分程度の時間であったろうが、私は1時間も2時間にもわたってその場で立ち尽くしたような感覚に襲われた。そして、ふっと、さきほど奇声、雄叫びをあげ、涙する利用者の姿を思い出した。

「死ぬー、死ぬー。死んじゃう、死んじゃう…」。

「死ぬー、死ぬー。死んじゃう、死んじゃう…」。

「死ぬー、死ぬー。死んじゃう、死んじゃう…」。

利用者の声が、私の頭の中でこだました。

なんどもリフレンした。

すると私は、「(ここで先輩らに言うべきことを伝えないと、この職場はこのまま変わらなくなってしまう、それだけはまずい…)」という危機感をもち、意を決して、反論を試みようとした。そのためにまず、大きな息を吸って、吐き出した。

そして、いざ、言うべきことを言えようと思った瞬間、

「…おめーは本当に生意気だな！！人を馬鹿にしてんのかよ！！なんなんだ、その態度は！！」

思いもよらない、この日一番大きな怒声が、あたりに響いた。

「(…馬鹿にしている？何を言っているのだ?)」

私は最初、彼らの怒りがなぜ急に増したのか、その理由にまったく気が付かなかった。それがゆえに、そのようなキョトンとした私の態度もまた、彼らの怒りに油を注いだようだった。以降、もう今では思い出せないくらい、つまり、記憶に残らないくらい、厳しい言葉を浴び続けた。

浴び続けたような気がする。

正確には覚えてない。

頭が真っ白になってしまったらしい。

私のかすかな記憶に基づくならば、中学生くらいの年齢のいじめっ子がいじめられっ子

に浴びせるような、実にこどもっぽい表現ばかりが、果てしなく続く雪崩のように、爆音と
なって続いたような気がする。

「(…30歳近くになる、大の大人になっても、人にそんな言葉を投げかける人がいるんだな
あ…)」

唯一はっきり覚えていることは、そんなふうに、まるで他人事のように感じたこと、驚い
たことはだけだった。なぜかそれだけ、はっきりと覚えている。

その後、どうなったかよく覚えていないが、勤務明け後、一人で帰路に就いたとき、彼ら
の怒りの起爆剤が一体なんであったのかについて、急に気づいた。

私が意を決して息を吸い、吐き出したその一連の所作が、
それが彼らには、

「渡辺、先輩である俺らにむかってため息つきやがった。『上から目線』で見降ろしやが
った」と受け止められたということに。

新人、つぶされる

その「生活指導員室での出来事」があった次の日からの仕事は、まさにストレスフルにま
みれた。

朝、職場に着いて、自分の靴箱をみると、あからさまにゴミが入っていたり、インナーシ
ューズそのものが更衣室に放り出されていることなどが起きるようになった。

生活指導員室に入室すると、同僚たちから小さな声で、「ナベは、おぼっちゃん…」とか、
「ぼんぼんが…」と何度もささやかれた。やがて施設内ですれちがうたびに、何人もの
同僚から「まじめ」「くそまじめ」「かたぶつ」とささやかれることが、日常化した。

上司に相談したら、「あいつらも悪い気があるわけじゃないから」と言われた。

他の職員に相談したら「でも、『愛の鞭』がなかったらどう援助すればいいのか…。渡辺
さんのいうこともわかるけど、理想じゃ援助はできないよ」と言われた。

…理想？

理想？

理想だって？

私が言っていること、思っていることは単なる理想で、現実的ではないということなのだ
ろうか？

もちろん、そういう面もあるのかもしれない。

障害を有する者とそうでない者がどうやってわかりあうことができるか、あの時も、あの
時からすでに四半世紀だった今も、よくわからないままである。だからこそ、理想は時に非
現実的であると、理解している。理解できている。そう感じている。

しかし、その問題と、「殴る」、「後ろ回し蹴り」といった援助方法が必要不可欠な理由、

そのような援助を行使するのが致し方ない理由は、まったくつながらない。プロレス技を用いたかかわりを正当化する理由は、何一つ見つからなかった。

工作中だろうが、休みの日だろうが、朝だろうが昼だろうが夜だろうが、1日中だろうが、どれほど考えても、いやほど考えても、何一つ見つからなかった。

また、上司、他部署（栄養士など）から、「渡辺君の協調性の問題じゃないか？」とか、「渡辺がチームの和を乱している」と言われた。

そして上司、同僚らは、「渡辺が、ちょっと大人になって、成長すれば、それで問題解決となるんじゃないか」と話し合ってくれた。

誰一人、私の主張を受け止めようとする者は、少なくとも表面上は、本当に誰一人といなかった。

私は、生まれて初めて「皆無」という言葉をつかって、自分の状況を口にした。

皆無だった。

私の理解者も協力者も。

私は、職場で、孤独となった。

ちゃんと援助するってなんだ？

…そして、

だから、

冒頭で述べたように、私は入浴介護中に、思わず耐えきれなくて涙したのであった。

きっかけは、同じく入浴介護を担っていた同僚Yが、その日プライベートで何か嫌なことがあったらしく、ひどくストレスフルがゆえか、まるで八つ当たりをするように利用者にかかわっていたことであつた。

私が素直に感じたままを言えば、Yはヒステリックになっていた。

自力では入浴できない重度知的障害者に対して、Yは甲高い声で叱責を浴びせていた。あまりにもYがキーキー叫ぶので、利用者たちはかなり動揺し、恐怖し、おののき、普段よりまして、浴室での彼らの行動はスムーズにいかなかった。そんな折、彼らの行動が円滑にすまないのは私の存在のためと感じたのか、Yは私にむかって、ヒステリックな声をあげた「ナベ！、ちゃんとやんなさいよ！」

私はその時、なるだけYに注目しないように、つまり、目の前の利用者の洗身介助に集中していた。いや、集中しているふりをしていた。

私の手はひと時も休まず動いていた。

私の口は、Yの声に殺されないように、利用者にもむけて穏やかな声かけを発し続けていた。か細く、ひ弱で、情けない、必死の、私の抵抗であつた。

もしかしたら、そんなみじめな有り様は、Yと同類かもしれないと思いつつ。

しかし、そのような私の、自責心、戸惑い、切なさを吹き飛ばすように、Yは何度も「ナベ、あんた、ちゃんとやってんの!？」と繰り返し叫んでいた。

その叫びに返答するより前に、私の頭に中では、自問自答が飛び交った。

「(ちゃんと?)」

「(俺のほうがあなたよりちゃんとやっているよ?)」

「(ちゃんと?)」

「(これ以上どうすれば、ちゃんと、できるんだ?)」

「(ちゃんと?)」

「(ちゃんとしてなんだ?この利用者たちを、嫌がろうとも浴槽に放り込むことがちゃんとなのか?)」

そんな答えのない/みつからない思考が、あの涙を招いたのであった。

怒り、悲しみ、厭きれ、憎しみ、情けなさ、弱さ…。

把握しきれないほどの感情がとめどめなくあふれてきた。私のふたつの目が一気に潤んで、涙がこぼれてきた。

だから私は、とっさにシャワーノズルを自分の顔にむけたのであった。

一体全体、何をどのようにすればいいのか、どう仕事をすればいいのか、まったくみえなくなってしまう。

これらはすべて、共著者である小幡知史氏、二階堂哲氏と出会う、10年以上前の出来事であった。

もし、この時、あるいはこの頃、この2人と出会えていたのならば、かくもここまでは、対人援助の理想と理念が現実につぶされることはなかっただろうに。

- つづく -